

五年間の県教育委員会勤務、その後二年間の浜田水産高校勤務を経て久しぶりに隠岐水産高等学校に着任しました。先日生徒会から「おおとり」の原稿を依頼され、さて何を生徒の皆さんにお伝えしようか深く考えたところです。

私は左手に、今ではちよつと古くなつた腕時計を着けています。まだ三十代の頃、担任をしていたクラスの終礼に行くとき教卓の上に綺麗な丸い箱が置いてあります。「何だ？これは・・・」生徒はいつものとおりに箱を開けてみると手紙が。「いつも時間が無いと忙しそうにしている實三へ。これを使って頑張れ！」と鉛筆書きで決して綺麗な字ではありませんでしたが、そう書いてありました。

そして箱の中には私が今着けている時計が入っていました。生徒たちは皆ニヤニヤし、「先生早く終わろうや」と・・・こちらは何が起こつたのか気持ちの整理も出来ないまま終礼を終えました。当時担任をしていた生徒たちがお小遣いを出し合い私にプレゼントしてくれました。

その日から私の左手にはその時計があります。何百万円もする高級時計よりも私にとっては超高級時計なのです。

また別のクラスを担当しているときでした。当時私は百文字の文章より一枚の写真をと、いつも古ぼけたデジカメで生徒の様子を撮影し学級通信に貼り付けて送っておりました。その発行枚数は（内容はともかくとして）年間で三十枚を超える超大作でした。

ある日、終礼に行くと、教卓の上に綺麗な箱が置いてあります。「何だこれ！」と開けてみると、中に手紙が入っています。「實三へ。いつも俺たちのことばかり撮っていないで、たまには自分の子どもを撮ってやれよ」と、そして箱の中には真新しいデジタルカメラが入っていました。生徒たちは皆ニヤニヤしていますが目を見つめます。申し訳なかったのが、何が起こつたのか理解出来

ない私はそのまま終礼をし、箱を持って職員室に帰ってしまいました。その直後、「あいづらこんな事考えやがって」とようやく事情を理解した私は心の震えを抑えることが出来ませんでした。

四十代の後半には、こうしたこともありました。三年生の担任として無事卒業式と最後のホームルームを終え・・・私はどうもしんみりするのは苦手で、いつもさっさと最後は終わろうとします・・・「起立、礼」。すると「ちよつと待った」窓際一番後方から相撲部で活躍した生徒が大きな身体を揺らし「これを使ってくれ」と。「何だ？」相変わらず事情を理解できない私は、「わかった。ありがとう」と言うだけで、これ以上いたら自分の心を見透かされそうでさっさと職員室に帰りました。

職員室で袋を開けてみると、ネクタイが。その生地の裏面には、「隠岐水産高校第八十八期卒業生」と刺繍が入っています。本当に心が震えました。

校長として着任した今年、左手にはいつも生徒がプレゼントしてくれた「時計」が、そして大きな行事や始業式・終業式には必ず生徒からいただいた「ネクタイ」をすることにしています。そして今でも時々校長室を抜け出してはデジカメで生徒を撮影しホームページにアップしています。

教師は生徒の成長の支えになるべきとは思いますが、私自身を振り返れば反対に、生徒にこそ支えられてきました。

困難に遭う度、私の心の支えは、私を先生と慕ってくれた生徒たちなのです。